



2025年度 人間科学研究科/人間科学部

人と組織のレジリエンス・サポートルーム

活動報告書



人間科学研究科/人間科学部
人と組織のレジリエンス・サポートルーム

2025年度

人と組織のレジリエンス・サポートルーム活動報告書

目次

趣旨・概要	3
2025年度活動状況	4
相談業務概要	5
<u>相談件数</u>	5
<u>今後の課題</u>	5
広報の取り組み	6
<u>ポスター、サイネージ</u>	6
<u>ホームページ、予約フォーム</u>	7
<u>紹介カード</u>	8
イベント	9
<u>教員のためのランチタイムカフェ</u>	9
<u>オープン・アワー</u>	10
<u>読書会『苦情はいつも聴かれない』</u>	11

設立の趣旨

人と組織のレジリエンス・サポートルーム（通称「レジサポ」）は、多様性を認め合うキャンパスのためのDE&I（Diversity, Equity & Inclusion）プロジェクトの一環として2025年春に設置されました。

2025年7月に西森年寿・人間科学研究科長／人間科学部長が公表した、以下の「声明」（HP掲載中）とも連動しています。

「研究科におけるハラスメント防止体制の強化について」

https://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/about/improving_efforts_harassment/

「レジサポ」は、学生・教職員の心身の健康が守られ、すべての人の能力が活かされるキャンパスづくりをミッションとしています。キーワードとして用いた「レジリエンス」概念は、困難やストレスに直面する状況に対して適応しながら成長する能力や回復力の意味で使われますが、「レジサポ」では、それを個人にもとめられる力としてのみではなく、構成員の関係性や文化・制度など組織のあり方にもとめられる力としてもとらえています。個人にのみ「解決」や「克服」をゆだねる図式から脱し、個人をとりまく環境の改善・健全化を重視する点が、「人と組織の～」とのネーミングに結びついています。問題が生じたときに、それを批判的に分析・考察し、改善に向けてすみやかに協力できる環境づくりをめざし、設置一年目である2025年度にはさまざまな新たな試みをスタートさせました。

中心となるのは、学生・教職員だれもが利用できる相談室としての機能です。表面化・深刻化したトラブルへの対応だけでなく、その前段階での敷居の低い形の相談が可能になることを大切にしながら相談室運営がなされています。HP・ポスター・玄関前サイネージに加えてトイレ空間へのカード設置や、後述のイベントを通じて、みなさんにルームに足を運んでいただけるよう、広報活動に力を入れました。トラブルを「芽」や「タネ」の段階で掘り起こし、構成員同士の対話によって状況改善につながる機会や風通しのよい雰囲気を作り出すことを目指しています。

そのためにも、集団・組織としてのレジリエンスを高めるねらいで、ランチタイムカフェやオープン・アワー、読書会など、交流の場づくりや啓発・研修のためのイベント企画を実施してきました。次年度にはハラスメントなどに関する意識調査・実態調査を行う予定で、秋から準備をすすめています。

以下のページで、相談業務、広報活動、各種イベントについてそれぞれ概要を紹介します。

最初の一年を乗り越えるにあたり、非常に多くの方にさまざまにご協力いただきましたこと、あらためてお礼申し上げます。次年度もどうぞよろしくお願いいたします。

人と組織のレジリエンス・サポートルーム 室長
木村涼子

2025年度活動状況

2025

- 2025.03 ● 「レジリエンス・サポートルーム（仮）」設置準備委員会
- 2025.04.16 ● 小田切由里特任講師（専門相談員）着任
- 2025.06.01 ● 近藤凜太郎特任助教（相談員補佐）着任
- 2025.07.11 ● HP開設 & 相談業務開始
研究科長声明「研究科におけるハラスメント防止体制の強化について」公開
- 2025.07.11 ● **人と組織のレジリエンス・サポートルーム（レジサポ）開設！**
- 2025.07.18 ● 「人と組織のレジリエンス・サポートルーム」設置準備委員会
- 2025.08.01 ● オンライン（Zoom）相談の運用開始
- 2025.10.15 ● レジサポカードの人間科学研究科棟への設置開始
- 2025.10.29 ● 教員のためのランチタイムカフェ & レジサポ見学会開催
（附属未来共創センターProject IMPACTとの共催）
- 2025.12.10 ● オープン・アワー 第1回
- 2025.12.22 ● 読書会『苦情はいつも聴かれない』第1回（ガイダンス）



2026

- 2026.01.14 ● オープン・アワー 第2回
- 2026.01.19 ● 読書会『苦情はいつも聴かれない』第2回
- 2026.02.02 ● 読書会『苦情はいつも聴かれない』第3回
- 2026.02.16 ● 読書会『苦情はいつも聴かれない』第4回
- 2026.02.18 ● オープン・アワー 第3回
- 2026.03.02 ● 読書会『苦情はいつも聴かれない』第5回
- 2026.03.11 ● オープン・アワー 第4回



相談対応件数

55件

内、新規件数37件、
継続件数18件
(2026年2月18日現在)

相談内容



日常の対人関係や
不安感、身体症状に
いたるまで幅広い

相談経緯



ホームページや
カード、チラシ等の
広報物が最も多い

今後の課題

2025年4月後半よりレジサポ開室準備が始まり、多くの先生方のサポートにより7月にはHPも開設され、「人と組織のレジリエンス・サポートルーム」として正式に開室いたしました。今年度の相談は、専門相談員1名（週2日）、相談員補佐1名（週2日）で対応し、ご相談者に曜日を選んでいただけるよう、曜日を固定せずに週ごとに不定期での開室としました。専門相談員はすべてのご相談に対応し、相談員補佐は、主に学生や院生の方の研究活動のご相談においてのみ、ご相談者のご了解があれば同席する形で専門相談員とともに対応しました。

開室後はレジサポHPからコンスタントに相談予約があり、月平均6~7件のご相談をお聴きし、人科内にレジサポの存在意義があることを感じました。

一方で、できるだけ多くの方にレジサポを知っていただけるよう、限られた開室日に様々なイベントも行いましたので、結果的に相談に充てる時間を削ることにもなりました。

イベントでは、「閉ざされた」イメージの相談室を開放し、どなたにも足を運んでいただけるよう「オープン・アワー」を設け、様々な方に立ち寄っていただく中で、立場や学系を超えて交流をしていただくことの必要性も感じました。このような取り組みの中から見えてきた課題としては、相談員を増員することで開室時間を増やすこと、また、留学生の多い人科内の相談室として、今後は多言語での相談対応も必要なことと思われまます。

専門相談員
小田切由里



広報の取り組み

ポスター、サイネージ



通年で運営していることを感じてもらえるよう、季節ごとにポスターを変えています

「こんな小さなことでいいの？」と不安に思われる方も、お気軽にご利用ください

- | | |
|--|--|
| <input checked="" type="checkbox"/> 先生や上司の言動でモヤモヤ… | <input checked="" type="checkbox"/> せき発表が毎回すごく不安… |
| <input checked="" type="checkbox"/> 身近な人間関係がうまくいかない… | <input checked="" type="checkbox"/> 食欲がない、眠れない、何もやる気が起らない… |
| <input checked="" type="checkbox"/> 周囲の期待に応えたいけど自信がない… | <input checked="" type="checkbox"/> やることが多すぎてパンクしそう… |
| <input checked="" type="checkbox"/> このまま研究を続けられるかな… | <input checked="" type="checkbox"/> ほかの人に嫌われているかも… |

人間科学部/人間科学研究科の構成員(学生・研究生、教職員など)であれば、どなたでもご利用いただけます。匿名でも大丈夫です。秘密は厳守いたします。

場所：吹田キャンパス 人間科学研究科棟本館 2F (M226)
 開室日：月水木のうち週2日(不定期)
 (1回当たり50分)
 相談方法：対面もしくはオンライン【要予約】
 専門相談員：小田切 由里
 (公認心理師、認定フェミニストカウンセラー)



レジサポHP <https://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/resilience/>
 相談予約・お問い合わせフォーム <https://forms.office.com/r/jiXAVikMM2X>

人科DE&Iプロジェクト <https://ouhusdei.hus.osaka-u.ac.jp/>

広報で利用したサイネージデータ

POINT!!

レジサポが開室した2025年の7月から、相談室の存在を知っていただくためポスターの掲示を開始しました。初期段階のメインイメージには人物を入れた写真なども検討されましたが、ジェンダーバイアスを感じさせたくないという意見があり、最終的に人物を入れない、部屋と家具をメインにした画像が選ばれました。

ホームページや相談予約フォームにつながるQRコードを大きく入れ、ポスターを見た人がすぐに行動に移れるようにしています。

相談室の趣旨として「事態が深刻化してから相談に訪れるのではなく、日常的な”モヤっと”レベルの相談からキャッチしていきたい」という思いがありました。スタッフ間で協議を行い、相談できることをポスターにチェックリスト形式で表示し、見た人に具体的にイメージしてもらえるようにしました。

レジサポは通年運営されていますが、同じデザインのポスターをずっと掲示していると、いつ貼られたかが学内の構成員に分かりづらくなってしまうため、トップイメージの植物や小物のデザインを定期的に変更して季節感を出すことで稼働状況が伝わるようにしています。





レジサポ ホームページ



相談予約フォーム

POINT!!

2025年7月11日に人間科学研究科のHP内にレジサポのページが公開されました。

HPにはポスターと同様に相談内容の例をチェックリスト形式で入れることで、「こんな些細なことでも相談していいの?」と不安を感じている人が気軽に利用できるように心がけました。

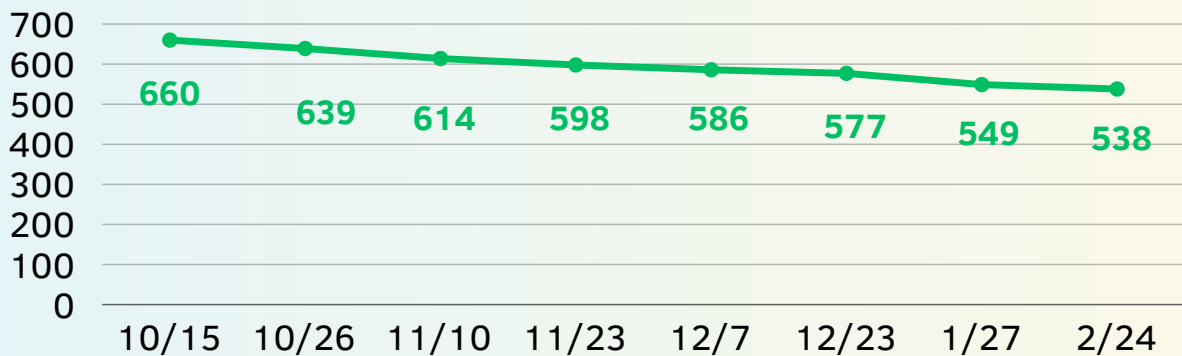
相談予約はMicrosoftFormsを使用したオンラインフォームから可能で、HPだけでなく、学内に設置したカードやポスターにもQRコードを表示しています。

直接相談室に来ることが難しい人のため、ZOOMでのオンライン相談も受け付けています。

紹介カード



2025年度レジサポカード残数の推移



※残枚数には水濡れ等で廃棄したカードを含みます

POINT!!

レジサポカードは、設立準備の中で「どのような所なのか分からないと相談しにくい」という指摘から、レジサポのことを出来るだけ多くの方の“手の届くところまで”発信できるようにと作成しました。

名刺サイズで手に取りやすいカードを作成し、トイレやリフレッシュルームなど、日頃からよく利用されている場所を中心に人科棟内40箇所余りに設置しました。

10月の設置後から定期的に枚数を点検し、順調に減少しています。実際にカードを見て来室された方もおられましたし、周囲の人に渡すために持ち帰ることもできます。相談のハードルが少しでも下がることはもちろん、困っている人、悩んでいる人が孤立しないためのきっかけになることも期待しています。



名刺大のカードを、トイレやリフレッシュルームなど、人科棟の40カ所余りに設置しています

「教員のためのランチタイムカフェ」



対象 人間科学研究科の**教員**であれば
どなたでも（非常勤を含む）

途中退出も
OK!

学生や職員向けの回も別途開催いたします！

⇒ ふらっと立ち寄ってください ⇐

- ✓ 研究文化や環境の向上に関心がある
- ✓ レジサポの活用方法を知りたい
- ✓ 相談員と話してみたい
- ✓ 社学共創について知りたい
- ✓ 他の系のことも聞いてみたい
- ✓ コーヒーとケーキで交流したい



主催：人間科学大学人間科学研究科 プロジェクトIMPACT
人間科学大学プロジェクト
「人とつながるレジリエンス・サポートルーム」(専修:レジサポ)
<https://research.hokusei.ac.jp/>



POINT!!

教員のためのランチタイムカフェは、レジサポについてより身近に知ってもらうための取り組みとして、附属未来共創センターProject IMPACTとの共催で実施しました。若手の教員を中心に西森研究科長と小田切専門相談員を囲んで、参加者は入れ替わり立ち替わりしながら20人の教員が参加し、コーヒーを飲みながら人科について自由に話し合いました。参加された先生からは、レジサポや学生支援についての質問や、定期的な報告や交流の場の必要性、開放日（オープン・アワー）の実施など多くのご意見も頂きました。

意外にも教員同士の交流の場は少なく、ちょっと気になったことを話せる機会も少ないという意見もありました。「前任校ではワンコインでコーヒーが飲めるスペースがあり、雑談できる機会があった」という経験談から人科でもそのような場が出来たらという話題も盛り上がりました。

当日は都合がつかなかった先生や、また参加したいと言われる先生もあり、今後も継続的な開催を期待する声も多く頂きました。

教員の感想

和やかな雰囲気です、集まった先生方ともお話ができて楽しかったです。

本日は企画、開催ありがとうございました。レジサポを見学でき、説明もしてくださったのでよかったです。

とてもいい雰囲気でした。実はあのよう気軽に集まれる場はあまりなく...是非、継続頂ければと思いました。

こうして雑談できる場があるのが、まさにレジリエンス・ビルディングに有効だと感じました。ありがとうございました！

多く参加されていて、関心が持たれていることを知れて良かったです

色々な立場の意見交換ができて勉強になりました。

「オープン・アワー」



対象 人間科学部・人間科学研究科の方であれば、どなたでも
(学部生・院生・研究生、非常勤の教職員を含む)

人と組織のレジリエンス・サポートルーム（通称“レジサポ”）では、皆様にレジサポを知っていただくため、オープンアワーを開催します。

- 「レジサポってどんなところ？」
- 「相談員ってどんな人？」
- 「どんなことを相談できるの？」
- 「うまく話せなくてもだいじょうぶ？」



…などなど、ふらっと立ち寄ってみてください！

場所 人と組織のレジリエンス・サポートルーム
(人間科学研究科棟 本館2F東ウィング M226)

レジサポ

人と組織のレジリエンス・サポートルーム
<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/resilience/>

レジサポ HP

予約フォーム



POINT!!

オープン・アワーは、教員ランチタイムカフェの参加者から「扉が閉まっているだけでも入りにくさを感じてしまう…」との声があったため、12月から早速実施し、毎月開催しています。DE&Iプロジェクトで実施しているパン販売の日に合わせて開放し、レジサポでパンやお菓子を食べながら自由に入出入りして自由に話ができる時間を意識的に設ける試みです。学生も教員も授業の前後の時間を利用して参加される方が多く、1月以降も月に1回の頻度で定期的実施することになりました。相談に至る前の小さな悩みや、相談すべきか質問したいなど、相談以外のことでも、身構えずに気軽に話ができる場になればという思いで実施しています。

他の参加者もいるため具体的な相談はできませんが、雰囲気を感じてもらい改めて相談予約につながるためのステップとしての機能も期待しています。また、オープン・アワーを通じて、レジサポの様子が口コミで広がることで悩んでいる人への後押しになること、相談には繋がらなくても、会話の中で問題が整理されストレス自体が軽減されることなど、目には見えにくい形でも様々な効果が期待されます。




読書会 『苦情はいつも聴かれない』 (全5回)

レジサポ
学生向け企画

『苦情はいつも聴かれない』読書会 (全5回)

理不尽に対して声を上げたいと思ったことはありませんか



『苦情はいつも聴かれない』(筑摩書房)
サラ・アーメッド 著 竹内要江・飯田麻結 訳

本書について
ハラスメントの被害を経験した学生や研究者から聴き取った膨大な証言をもとに、大学組織が「多様性」を掲げながら被害の訴えを封殺していく様子を描き出す。被害証言だけでなく、組織に改革を迫る学生や教職員の連帯行動も描かれている。


第1回 ガイダンス：2025年12月22日 (月) 15:10-16:40
 第2回 2026年1月19日 (月) 15:10-16:40 第3回 2026年2月2日 (月) 15:10-16:40
 第4回 2026年2月16日 (月) 15:10-16:40 第5回 2026年3月2日 (月) 15:10-16:40

1回当たり90分 全5回、第2回以降はオンライン参加も可能です。

人科の学部生・院生・研究生ならどなたでもご参加いただけます！
 ※第1回のガイダンスは対面で開催いたします。必ずご参加ください。
 ※ガイダンスまでに本を読んでおく必要はありません。

人と組織のレジリエンス・サポートルーム
 吹田キャンパス 人科棟 本館2F 東ウイング M226

近藤凛太郎 (レジサポ・特任助教)
 rintarokondo.hus@osaka-u.ac.jp




参加申請フォーム
12/19日 08:00

申込方法：QRコードから参加申請フォームにご記入ください。
 定員 (10名) になりましたら申込を締め切らせていただきます。


周囲の人や自分自身のハラスメント (を生み出す価値観) に気づく視点を養い、被害者に寄り添う**アクティブ・バイスタンダー**のネットワークを学内に築くことを目的とした読書会です。

※アクティブ・バイスタンダー (行動する第三者) とは？
 ハラスメントや性暴力を見逃さず、被害者の味方になって行動する人々のことを指します。




レジサポ

人と組織のレジリエンス・サポートルーム
<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/resilience/>



レジサポ



予約
フォーム

広報で利用したサイネージデータ

POINT!!

レジサポが担う研修・啓発企画の一環として、今年度は学生対象の読書会 (ガイダンスを含めて全5回) を実施しました。組織内でハラスメントが起こったとき、被害者の味方になって行動するアクティブ・バイスタンダーのネットワークを学内に広げることがを目的に、従来型の研修をこえた深い学びの場を作ることを目指しました。対象書籍としては、膨大な被害証言をもとに大学組織の問題点を描いた『苦情はいつも聴かれない』 (サラ・アーメッド著、2024年) を取り上げました。

多様な背景・経験をもつ学生が参加することから、進行にあたっては下記のルールを毎回アナウンスすることで、安心できる空間づくりを心がけました。学部生から博士後期課程の院生まで幅広い層が継続的に参加し、活発な議論が行われました。ハラスメントの現実について知識を得るにとどまらず、参加者それぞれが経験や想いをシェアし、組織内の隠れた問題点をいろいろな角度からあぶり出す貴重な場となりました。同様の学びの機会を、教職員も含めたより広い層に展開していくことを来年度の課題にしたいと思えます。

相談員補佐 近藤凛太郎

この会を安全な場にするために

- ・ここで話した内容が外部に漏れることを心配しなくて良い場にしましょう。
- ・全員がのびのびと発言できる場にしましょう。話したくないことは話さなくてOK。
- ・視点や考え方の違いを受け止めあえる場にしましょう。
学術的な知識の獲得だけがこの会の目的ではありません。
- ・ハラスメント被害をうけた人の声や経験が最大限尊重される場にしましょう。
- ・容貌や名前をもとに、性別・性的指向・性自認や人種・民族・国籍・宗教などの背景を詮索されることのない、安心できる場を作りましょう。

『苦情はいつも聴かれない』読書会に参加して

昨年、人間科学研究科棟の掲示板にこの読書会のポスターが貼ってあるのを見つけた。

『苦情はいつも聴かれない』という本のタイトル、そして表紙にある「狂っているのは、私だろうか？」という言葉。ハラスメントや差別に対し声を上げた人々の膨大な証言から集めた「破片」が詰まった一冊で、ひとりで読むにはすこし重たい。

私の大学生活は残念ながらハラスメントと無縁ではなかったので、この本を読むことによって、なにか、これまで忘れたことにしていた苦い経験の蓋が開くことはわかっていた。「沼にはまるぞ」と頭の中に警告音が響いていたが、それを引き受けてでも、この本に、読書会に興味を持って集まって来るであろう誰かと一緒にこの本を読んでみたかった。

いざ本を手にとるとやはり重たい。500ページ超の単行本なので純粹に重量として重たいのだが、読み始めるとより一層重く感じた。本文中の彼女たちの証言、「声」を受け止めながらページをめくっていく。「声」は、文字の羅列ではなく彼女らの声そのものとして直接私に届いてきた。それらはあまりに生々しく、気が付くと深呼吸をし、胸を押さえていた。似た経験をしたことや、リンクする記憶が呼び起こされる。「わかる！」というより「あああ・・・」というように、共感と苦みの混ざったため息が漏れた。普段本を読むときは一息に呼んでしまうが、この本はそうはいかず、少し読んで閉じて、息を整える必要があった。それでも、読むのをやめる気にはならなかった。

読む手が止まらなかったのはなぜか。彼女らの「声」を丁寧に丁寧に拾いあげて紡ぐアーメッドの文章はどこまでも彼女らを尊重し、寄り添っていた。アーメッドは、証言が私に託されたのは、私がそれをあなたに、読者に、聴衆に、苦情を訴える人たちに伝えるためとしている（下線部は「はじめに」より引用）。そのためか本文中には「あなたに」という呼びかけが多用されており、アーメッドから直接語りを聞いているようにも感じた。こんなにも著者を近くに感じながら読める本はそうないだろう。あまりに生々しく、読むだけでも苦しい本だったが、証言者（彼女）にも読者（私たち）にも寄り添うアーメッドの文章には、どこか希望を見いだせる気がしたのだ。本の前半は証言を聴く姿勢で読んでいたのだが、「あなた」というアーメッドの呼びかけに段々と引き込まれていき、後半は彼女らの「同志」のような気持ちで読み進めていた。

苦情が正当に聴かれるようになるとか、苦情の種であるハラスメントや差別そのものがなくなるとか、そういう救いは今のところない。苦情はやはり聴かれないし、ハラスメントも差別も横行している。それでも私たちは屈することなく私たちの人生を堂々と歩んでいいんだ、共に闘う仲間がいるんだということを第8章で確認してこの本は閉じられる。

冒頭で、ひとりで読むにはすこし重たい、と書いたが、みんなで読んでも重たかった。ただ、この読書会では「（可能であれば）自分の経験に引き付けて読む」「読書会で話されたことは外に持ち出さない」などのルールで、心理的に安全な環境が保証されていたため、読みながら感じたモヤモヤや、彼女らの証言から思い起こされた苦い経験についても安心して共有できた。他の参加者の経験談や想いにも触れ、1回90分では足りないと感じるくらい、充実した時間だった。この読書会を通して、日ごろ持っていた違和感やそれに対する憤りなどを共有し合った経験は、これから生きていく上でのお守りになってくれるだろう。

最後になりますが、企画してくださったレジサポのみなさま、一緒にこの本を読み、言葉を交わし合った参加者のみなさま、ありがとうございました。



「苦情はいつも聞かれない」で特に印象的だった一節に、「苦情を訴えるという経験をする事によって、...なじみのものが息苦しさを覚えるものになりうる」がある。苦情を訴え、その訴えが組織に退けられたりまともにとりあわれなかったりする経験をすると、組織は信頼できないものとして立ち現れ、慣れ親しんだ世界がわけのわからない場所に変容していく。

苦情を訴えると景色が変わる。それだけ、苦情がある世界と苦情が隠されている世界の間には隔りがある。けれどもこの二つの世界は、同時に存在している。苦情は様々な場所に潜在しており、見えなくても存在している。この本を読み読書会に参加することは私にとって、自分が経験してこなかった、でも全く心当たりがないわけでもない世界を、目の前に差し出されるような出来事だった。それをしかと見つめられるのか、受け取ることができるのか、試されているように感じた。

差し出された苦情のある世界は、全く心当たりがないわけでもない世界だった。それは「なんとなく分かるような気がする」ということで、たとえば想像の中で経験したこともあった。無邪気なセクシストおじさんが湧いていたバイト先に通っていた時、家に帰ってから頭の中で彼らとけんかをしてきた。実際に言われて引っかけた一言を問いただすシーン（想像）、それに対する彼らの苛立たしい応答（想像）、それへの反論（想像）。それらを全部自分の頭の中でやっていたなんて滑稽だけれど、私の頭の中の彼らの言動は、この社会がどういう場所であるかを反映するものだったのだろうとも思う。現実世界で垣間見えたしんどさをイメージの中で広げることが、隠された世界を引っ張り出すひとつの方法だったのかもしれない。そこで感じたことが他人の苦情に耳を傾けることに繋がりうるのなら、無駄に自分を苦しめているように思っていたあのイメージも、そんなに悪くないじゃんと思えてくる。

「なんとなく分かる気がする」は100パーセントの共感ではなく、むしろ「完全には分からない」に近いかもしれない。けれどもそれは、話を聞く手がかりや、関心を向ける取っ掛かりになるような感覚に思える。読書会では、そうした「なんとなく」を手掛かりに、自分の被りうる差別、それを生み出す性差別的な社会構造について、参加者と共に学び向き合うことができたように思う。

性差別は恐らく、いまここにいる自分に必然的に降りかかってくる災難なのだろう。他方で、いまここにいる自分に必然的に降りかかってこない災難もある。そのひとつが人種差別であり、今の私は、性差別絡みの苦情を「なんとなく」の感覚を手掛かりに聞くことができて、植民地主義に起因する苦情ではそれができないかもしれないと感じている。たとえば人種差別に抗議するイメージが離れなくなったことはない。苦情のある世界は隠されていて、想像においても見ずに済んだのなら、私にはそれが本当に見えていないんだと思う。だから、「なんとなく分かるような気がする」なんてことは全然ない、そこにおいては自分がむしろ特権的な位置にあるような構造について学んで、隠されている世界を引っ張り出す作業をやっていききたい。

大学組織や、様々な場所に、差別の歴史が織り込まれている。そこで必然のように苦情が生まれ、封じられる。何百年にもわたって、数えきれないほどの場所で繰り返されてきた加害があり、被害を受けた一人一人の苦痛がある。隠されているから見えづらいけれど、すぐ隣にそんな苦痛があったりする。どこにでも亡霊は漂っている。

社会がそういう場所であること、このしんどさを一体どうしたらいいんだろう。「なんとなく分かるかも」という感覚を取っ掛かりに誰かと繋がっていくことを、希望のように捉えていいのだろうか。いいような気もするし、でも同時に、曖昧な言葉で誤魔化してしまうこと、重要な差異や分からないはずの差がそれと知られないままかき消されてしまうことへの絶望もあるだろう。私はこの読書会で、その両方の感情を経験したように思う。自分は性差別を「女性」とは異なった立場からも経験することがあるし、人種差別を「なんとなく分かる」こともできない。だから今は一旦、どこかに希望を見出すことはせずに、アーメッドや参加者の方々と一緒にないと来れなかったこの場所のこの重力を覚えていようと思う。

私は、大きな言葉によって何か覆い隠されているときにもやもやした気持ちを感じることが多い。「マナー」という言葉で、誰かを傷つけている慣習を正当化したり、「ただのわがまま」という言葉で苦情をはねのけたり。表向きには「多様性」「共生」という言葉が掲げられているけれど、何か排除されているのではないかと感じるような場面もある。あからさまな差別が表立って正当化されるよりはましかと思ひ、社会でうまく生きていくためにも、些細なもやもやは受け流しそうになることもある。もやもやを主張しすぎると、「常識外れ」で「場の流れを邪魔している」存在とされてしまう。でも、もやもやすることを受け入れてしまっ、いつしか自分が誰かのもやもやを生み出していく側になってしまうこともすごく嫌だった。

この読書会は、そのような今まで抱えてきたもやもやとした気持ちに目を向けて、それを安心して共有できる場だった。普段誰かと会話しているときは、話していることと自分が思っていることに少しずれがあると感じることがよくあるが、この場では、「これが本当に言いたいのか？」と考えながら、ゆっくり話すことができた。また、私自身が、聞こえのいい言葉を使うことによって、目を背けてしまっている可能性があることも忘れないでおきたいと思った。

そして、このような安全基地となる場が、大学生でいる期間だけでなく、過去の自分にも必要であったし、これからの自分にも必要であると感じた。自分の小さな違和感を大切にしてもらえる場があることで、社会の大きな声に傷ついたときのお守りのようなものになると思う。ちょうど読書会の最終回が終わった数日後、とても嫌な言葉を投げかけられる場面に遭遇し、しばらくそのことが頭から離れずに傷を感じていた。本に書かれていたような苦しみを経て訴えられた苦情が、権力を持つ者にどれほど軽くあしらわれているのかということを感じ、社会に対する恐怖心を抱いた。しかし、この本を取り巻く人々や、読書会で出会ったみなさんもこの世界にいるということをおぼえ、なんとか救いになったと思う。

私はこれからも、自分が本当に大切にしたいと思うことを大切にしたいし、それができる世界であってほしい。



人科の皆さんのための相談室

レジサポ

人と組織のレジリエンス・サポートルーム

レジサポ
HP



予約
フォーム



人科DE&Iプロジェクト

多様性を認めあうキャンパスへ

<https://ouhusdei.hus.osaka-u.ac.jp/>



開室日：月水木金のうち週2日（不定期）

相談方法：対面もしくはオンライン
（要予約、1回当たり50分）

場所：吹田キャンパス
人間科学研究科棟 北館5F N501

スタッフ

室長

木村 涼子

相談員

小田切 由里

相談員補佐

近藤 凜太郎

事務補佐

八木 倫洋

事務補佐

近藤 千鶴

人科の皆さんのための相談室

レジサポ

人と組織のレジリエンス・サポートルーム

本館からは1～4Fの
渡り廊下を通り、
北館の階段かEVで
5Fに上がってください

! 本館5Fから
北館には直接
行けません

